



勢語臆斷卷之五

藏文庫

藏文庫

九畠  
しづとととわらうへうわうくみをととすすんやう  
からう後よ男わうくふくふらうひうりうみをこすん  
うそわくねく時くものりいおをせくう。

は女ハ太良相ノ女陰放内侍々淫春ニキヤムラニホ  
ヨリとて後の男ハ太良相ニヨリモトテ吉太良能

有文德天皇御席アヤウリ

女ヲヨリ絶くヘリウリハかれよやううといまち男の  
ねすとくもと自物つりあこせあうう

ものすくへひるわどくらみひすうりうちふね波音  
内侍もよいすくううううあとくわうのじく

真名  
女之方尔圖  
繪人成計礼  
波扇尔國遺  
利計流乎

きりひくとゆすあひくわとくまやひれ  
を脚きもとあわつせよひくとくみ在中  
ねすすんりてほやねのとようとあとくまよお  
こせうらうふよわくひやくまくへうていくらひ  
蒙りへわくやくまくあくとくわくわく  
かのをとくつく

日本紀神代と最要とづくちとくあき

がのえくわくといすてたまくわ

絆とすくからせみとくう

ことくわくとみてたまくとがくくわくとくわく  
くわくとくしてよくわくわくわくわく  
くわくとくとくとくとくとくとくとく

さくわくわくはくわくわくわくわく  
ひまやくわくわくわくわくわくわくわく  
まんかくわくわくわくわくわくわくわく  
もんかくわくわくわくわくわくわくわく  
かくわくわくわくわくわくわくわくわく  
かくわくわくわくわくわくわくわくわく  
とあわくはくわくわくわくわくわく

くとねくわくわくわくわくわくわく  
わくわくわくわくわくわくわくわく  
わくわくわくわくわくわくわくわく  
わくわくわくわくわくわくわくわく  
わくわくわくわくわくわくわくわく  
わくわくわくわくわくわくわくわく

蒙古文

卷之三

あくまでもうのちすひふれおまもと花よせぢれ  
はまゆめかとうてりぬ乃男かくどうせてもまゆえ  
くまよそくまをたゞくわうとの句近ほきら  
もせく行くひづくふやくよえくふくよみまよのむ  
葉よたく花よ詠ふせ やくよぐれたくくみ葉乃せ  
めてもひくま、あくきわとも形じまとおほくまほくよ  
くまくわくわくわくわくわくわくわくわく  
まをたまくすくわく

ひく。家臣はまことに男をさう女のことをも  
と考ふみうてよしむらの

いとく  
わざわざ  
おもてなしのまゝ  
おもてなしのまゝ  
と

よがくまくは万葉み舞船とさうめりとやくらのまく  
にさのほりくしむのまくからまく  
をくまくちくわくとあくわゆまくねくまく  
ひくまくくわくまくまくのまくくまくとくまくめくまく  
まくまくをたまくまくのまくまくまくまくまくまく  
くまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
くまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

莫といひまくやめとくへねうとゆうてあるよゆう

えまくらり文選古詩云河漢清且淺相忘復幾許盈

盈一水間脈々不得語同謝惠連七夕詩遐川阻隔

愛終諸曠清客遊仙窟云如今寸步阻天津

万葉云水無事すく水盡何をあひ浦代のう

はみみをくわひきう

九十六段

しりく男在かく女とくかくつゝ夕日をすくらうす  
しのぶはくくくくやくいきくやくくふとくらう  
遊仙窟云心非木石豈忘深恩白氏文集云人非木  
石皆有情淳氏至危ふの事にかくわやれまも  
てゆすんあくれうゆふとおホカトねへゆも

あらまく

秋のうちまゆ月のもらもかくらふを

和名集玉釋名云望月

知都波月大十六日小十五日在

東月在西遙相望也万葉云

ゆのねすくらげをくらす夕のうちまゆもかくらう  
望をもちとも車の唐のわに角おをすくうて角  
けは圓もくのまつともとみどもと通じるのも  
ちとりすく下緒とりともも圓滿のわに角の

まくらゆ夕のうとくらう

きんむきよかくとつよろいてたつう  
わづれをねりせかくうてあくらへさんとくらうを  
ねどんのうとくまよはすまくまよえくらへあくら

まくら

をくちひもこせういきとやまのものに

やまのさうもひつみのさうとけむとしもくと

まかうあくよ

けれは  
きれ女育  
さすまき  
ほぬこみ  
弓

たすきゆすみのよきよきとらうとくのふくへ  
あまがまもくらぬくひてくうけもくわくすくみへ  
吹くらん付かまくわくとくとく

淮南子 晖者望涼風于秋 曾丹集々

せみみのうすく、このものやまとくめあすくわくは  
うそおなじともわせどにるいれがうもよめくやひをとく  
毛詩云匪我愆期，子無良媒。将子無怒。秋以為期。  
せすくのれわくすくわくとくとくくわくわくいとく  
すくわくとくとくせぢてとく

あくおきくいきく、くまくまのとくゆくすくよ  
舌ひくらう付くねぬよいつちくくわくみひくらうむく  
べりくすく

うきうれきくみくふつせうんくふくくすく  
ちくくくふくみくみくからくのとくまくとくくを  
くあをよみてかくつけてかこせくう

うきうれきくみくふつせうんくふくくすく  
かくのとくがまくへ日よりくとももつくあひれへく  
あくうとひれもきてかうとこせくうとくのほく  
くうくふくせひきとくもくとくあくらきハとくか  
のとくうとくとくふくせくうとくらきひのくよく  
とく女のとくとくとくとくとくとくとくとくとく

かくへかうる年號はりうるみきる  
日 ひまむちまきれわん年とてうもかがむえう松わうれ  
とかくにまてかくまくへひこせはうれとやくそりふ  
をやうてのらほひまくまくちくとくてやわくら

まへさすてやうへりらまくわうひうやまふ  
まよかうやうかうまよかうまよかうまよかう  
ふのまよかう

物語通言

家事にあらぬ事とありて呂ハシミテ有る。然し  
方々あすみりもひきよる。事よりうもしくよ海へ  
よさくあらめうるや利ある。後は此のものとて、これ處  
寄す。まことに、ねてもやよみどりともぞひのう  
とくもあくやもとほくと、是後といふすと、もと其に  
をゑむとくはちゆうてけりしまば私するゆゑは  
手筋努力のかすく、うつむき接ひうるべく、  
せの口うなぬよく、うるうる後が、は海へのうまする。付  
さうゆふへくも、ばすて入るのうきき日とども  
足ひみとくでうし、しらひよくうえとみづけめ立五  
つよせんぬみさくとおうて、恵ともれわすもきう耶  
是の御のあくび後をうなはし、一條筋因考かげたまは

神代卷下云、海神因教之曰、以此沟與汝兄時則称  
是鈎滅鈎落薄鈎言訖、以後手授棄與之勿以向授是と川た  
まくもと約とあとよとのすく後より是をうけん又  
おこひす日本紀云、問後手有意哉否、師說屬物  
乞時必後手也。まとと又述す。今考之  
舊事紀第三云、經津主武甕槌二神問大己貴曰、汝  
將此國奉天神耶、以不如何于時、大己貴曰、當問我  
子、更代主神然後將報。徵來八重更代主神問將報  
之辭、時更代主神謂其父曰、今天神有此借問之勅  
我父宜當奉避。吾亦不可遠因於海中造八重蒼柴  
籬、踏船柂而天之逆手引而青柴垣打成隱。古事紀  
云、遣天鳥、舟神徵來八重更代主神而問賜之時語

其父大神言、恐之此國者立奉天神之御子即踏頑

其船而天逆手矣於青柴垣打成而隱也

訓柴云  
布斯

はあまよ天の逆もとうみのれへ海への後となり

みふく日幸紀もゆく天をみくらへゆく

ゆきの月をば相くのうせらも相章矣やく飲ふ

の相うばゆみすむかすむはゆくもうぢり

半代みのうくまどおみづものうみくわゆく

ゆくは世はをくわゆくめくわくアトモくい

ふくでゆすあけとすとくとえちのほりゆく

うくとてれのほとてれすあれある一もうれとく

もはれにとりもくとくはれに古事紀やくがりゆくま

とくうりあすくとてくれうくうるわくく

しくにくくのうくとくやくのうくわくく

あくやくくはくくとくとく

九十七段

懷風藻之正  
六位上刀利宣  
今詩立首賀五  
八年

うちのをさ九年みがうへせとく日中ぬりうげ  
やまづれ

昭宣ス基經貞觀十四年八月二十五日任右大臣左  
ちぬ三十七歳十七年春花賀むるもくわう日十  
八年根政垣河駁の家九條ノトウヤキニモニ  
移アリ候トマヒノクムヤシキモハえ慶え年中ぬ  
往々は時是中おもむくわくも極なほんのらす

よひり

桜もむらやまくりとえうのじゆりやうなすうふ  
さきがくまよ絶えとくアマツアマツアマツア  
マカトアマツマムムハマムカマカマカマカ  
マカトアマツマムムハマムカマカマカマカ

先の初りわがうをまくふへれ昭のちうねくも  
まくもかうもほせよとくくくくくくくくく  
まくもりうあく難くよ

をうのえとあせとがくとまくとくくくくく

はすとぬとよすく

桜もむらやまくりとえうのじゆりやうなすうふ  
九段

い／＼おやれいかいおうちとくきこのちわく／＼まく  
良房天安元年二月十九日太政大臣五十一四月九  
日從一位二年十一月根政貞觀十四年九月二日

薨謚忠仁公以美濃國封之

にか／＼すつ男もくとくふ梅の化ア枝よきと  
つけてますとく

まほが年ニシテ集中ちるに保昌院の内よりお梅  
の枝よりとつててまつてくを補叙

おのせむすのあくわゆもねみ梅へらをせば

五、三、年、保昌院

おのの梅の梅もすわどりもへたるからもそれ  
まくまくもまつてめくらはんとまこととて  
化りねうれしうきいもくとくまほのまよよ  
もまくまくよへすべく保昌院

おのひえのめく折花をまつてもまみわうそ有する  
東今集院は見ますよくまくらしてゆの五ヶ院  
アヤシムかうてうべのいそくはあそらとのかわいま  
うちえのやうくはせうと帖をかくのみまよ

かくらひまくまくあうすのまくはーもま  
おとくねたのはみ作り元のめぐれへまくまと  
まくらきてある忠仁公といふぬまえうれしわ  
花もくじくもまくわるれとくまく  
とくとてまづくらくはりかくくおーかまく  
てくじくふくにまづく

七、九段  
しく右とのては陽のむくらむは

一、年、うちおまの方をむけのては陽もくらくまく東の  
まくらのては陽もくらくまくはのくび昭和三百  
た近のまくは四日右邊のまくは四日左邊をまく  
皆六日左邊をまくは六日右邊を四日左邊をまく  
沿舍へ水干とうまくまくとよて福の瓦とくらの

追考後秋八月五日と  
五日六日雨  
五日八月の  
五日八月五日

のひをきりとくいもんと必然の理ありと月競馬因  
史より五日と首脚質とりへえり後れの五日よりま  
でもみちりをきりやうとあとてくわいわゆれれ  
川わへ五日と首あよきをとせなへ五日へたば馬場  
のひをきりみ日やうたへ右ようたかれと何奈を道る  
坊の日をのひをきりとくへてたばのう傷のひとくす  
ましれや只ひきりみ日とくすとてちばのう傷のと  
えきりとくちばのうきとみひとくりとくわ  
らきり五日へとみ賣す日からかちをみめそらうな  
う下馬場へうやまと船へむまくやうと  
らんされとるのまよ漢ちとりと湯抱言まほの俗のい  
いとくわいわ

しきひよきとるよりう車みをへのかかのあくすくね  
里々のふええれも中かくらうる男みよみてや  
りうれ

和名集云車薦唐韻云愧慎愧薦二音俗云車薦車惟也

見しものよもあくの意ちくいもあくふやかくめくどん  
車々意一言よがくにみもかくふぞくもわみくの  
ヨリカとくくかくじんちうんをつてやくまくまく

あきよみ何くわやうじれてのそんざいの、まもきうけられ  
日くよくくまくにかくともまくみくもまくうじれてい  
くんざいこそまくいまとハやりよひゆくひりふくのまよ  
くくじうつときうやう日充紀よ等者とまくとまく草

ま方葉も指南のまと用いゝまく

後ふたまくとまく

後あひのうううう五、あみまくとみづほやす  
かようとひきう太かあほまき女のうくよまくねう  
里彼よりくと市やねわえようとくふみくわう  
くのもくみたうトすのもくみうはまのふ  
いとくえでうわやくいからくううふもくねてゆ  
くうりんやくもてやくうううよ

女近

又そよみりんとまくとくらうかくうよのげよのううる  
かくられともはねほりよひよちく年みよくつづく  
清かぬえうふりよづくにれわくのうかくあおえ

和名曰在清  
京殿西

のまへは原をみちとてりつゝ  
後原のまは北乃方とてぬはなまつゝもん  
やかうの馬券のらやうは車紀各のまとまと  
あうたわらのまと

あらかじめの用意のうやうは車紀三名のまともとす  
あうちわのまとく用  
わざわざしとくれんのせつゆゆきよとくまとく  
りふくらはせたすとくにんおとくあくうて  
とくにまきやのゑきすむすとくもと  
とくくくえきよまとくまくまくやくとくせき  
まとあくれくわゆまくまくとくまくまく  
にまくわゆまくわゆまとくわゆまとくわゆ  
まさかわゆまくわゆまとくわゆまとくわゆ  
何くわゆまとくわゆまとくわゆまとくわゆ

あく印を以て其の事は御心に於て御存じたる事と  
又人情のうへりある事ではあるまでも之と云ふ事は  
やうとよすが、かくしてかうの事よりかへり事  
とてかくす。一達事とてかくす。かう集もとれ  
かうとよきの事とてかくす。ひてまやかとほの事と  
てかくす。ひてまやかとほの事とてかくす。  
の事とてかくす。ひてまやかとほの事とてかくす。  
名かきと達志の事とてかくす。わざと一達事と  
てかくす。ひてまやかとほの事とてかくす。ひて  
まやかとほの事とてかくす。かくす。かくす。

○勢語臆斷

てうへて三日とおもひうへて三日とおもひう  
せうへて三日とおもひうへて三日とおもひう  
せうへて三日とおもひうへて三日とおもひう

あらまちのうへて三日とおもひうへて三日とおもひう

三日と集

佐原大輔

もよれうちのわいのまかくさをとておもひうへ  
ふれんおもひうへておもひうへておもひうへ  
ておもひうへておもひうへておもひうへておもひうへ

あやのわにゆくよせてやでおもひうへておもひうへ

はくやくわくわくぬ郷のわくまくの名前うへ  
見おもむけおもむのかよ早れよとまよのわよあくと  
傳うへるおもむけおもむけおもむけ

やまなうおもむけおもむけおもむけおもむけ

忘るむるせんへはくらうとくとくとくとくとくとく  
續ちくゑ四くとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

百段

しりへたき情せうへりへりへりへりへりへりへりへ  
よれ酒うへりへりへりへりへりへりへりへりへりへ  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

行平ハ貞觀六年より行平とくとくとくとくとくとく  
師正三位吉野守由うへ貞觀十六年より中弁とくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
希アトシヘ行平を行平を行平を行平を行平を行平を

わがやうな事はまだせてあるやうで、あわづとまう  
ともは不すじつひとあやからずとくの良きの行き  
のおよき酒わざとまかみしてりふうとまちかくのと  
そふらむなよひきよまくらやうやうとゆるてん  
にひぢねとわうしきくいとあくのとそひとくと  
ひくわうくわうかくよ花とくわう

ちく年をまほほのふすもすもよ梅のものが  
うせし年ととてあるうれすすももさくくは  
う梅とかくととてかく花あよゆくとくと  
かくすくらかくらのうたわとくのうたにから  
すてらくとおひくくわうみま枝の五くはくうと  
うがくことくとくかくらのうたはくくわう

せみの中ふわくらむ花あうひう

すく年をまくらむ

くわのうくらくとくとく

よめやあくらくとくとくのうとくううう世へ五くよ  
くよもうううううううううううううううううううう  
うううううううううううううううううううううううう  
うううううううううううううううううううううううう  
うううううううううううううううううううううううう

万十

いあくらくとくとくのうとくうううううううううう  
うううううううううううううううううううううううう  
うううううううううううううううううううううううう  
うううううううううううううううううううううううう

すまへうわと  
ひそくあらう  
まことゆく  
やうこそ  
おほきく  
誇ほすと  
まゐる様に  
礼あると有す。引  
まへむわの  
きこて年  
碑すと  
墓も集  
かくわらば  
こののむを  
とれども  
かみむか

もくもくうすのまへてくわくわくすまへる  
よもやあわいかく  
候ものとよかくまくわゆくよほくちあうも  
候ものとよかくまく忠信のととのむくまく  
をうむよすくまくまくとすのとらよくまく忠信おま  
きのとくにまくまくとく  
やくかくも徳とくにとくとく  
あくまくくのとくとく  
ゆきとくまくまくのとくとく

にけり やくとくひてまくらをかく  
らへぬううう  
せんじゆくふすもうよみうるふやくまくらと  
あがく あがく  
重複  
山うとくわうううまへよあらううれ せやうとく  
あがく あがく

奇々の事かのへは見やうとまつた  
と申ゆるが、とおもふと仕事  
あるあると申すが、おまかせ  
事かのへは見やうとまつた  
と申ゆるが、とおもふと仕事

もへてもあつてからぬ所のまどあやみわらひ  
さうとくは額と通ふとくとうもとくひ  
すまこすとすと額とく法の教をやるが  
よのむりと様くすめ額とくへうへくも  
ゆの程のまくらへくえすくもあんきち  
くまくまきのゑあくまくまくまくまくま  
あくまくまくまくまくまくまくまくまくま  
みくまくまくまくまくまくまくまくまくま  
みゆきまくまくまくまくまくまくまくまくま  
みまくまくまくまくまくまくまくまくまくま  
みまくまくまくまくまくまくまくまくまくま  
みまくまくまくまくまくまくまくまくまくま  
みまくまくまくまくまくまくまくまくまくま

ひきうへくまくまくまくまくまくまくまくま  
ねまくまくまくまくまくまくまくまくまくま

まくまくまくまくまくまくまくまくまくま

射後撫を教とまよおきちおむす山里みほくと  
ゆかくまくまくまくまくまくまくまくまくま  
す仙人やのまくまくまくまくまくまくまくま  
世のまくまくまくまくまくまくまくまくま  
アマクマクマクマクマクマクマクマクマクマ  
神人居焉肌膚若冰雪綽約若處子不食五穀吸風  
飲露乘雲氣御飛龍而遊乎四海之外

し  
百三段  
じ  
男めうきういすめすめすめの言ひ

ゆきりあり

はあえようちよもととくを要そとかひて御教へ  
文遣のからよみやめやくふらう

は草むかくよわんけくやくらう

仁明天皇諱正良嵯峨第二皇子在位十七年嘉祥  
三年三月二十一日崩同二十四日葬深草山下す  
おまえまくやゑよほののかくさくう墓手二十  
五丈余すのこゆり

くわやまくわやあくわく

くすすまえよを要そとくゆきよみゆわう

即よだらのつひきひあくとわひひうあくま  
にゆの事ふゆきゆきせはりうれきを立ア

ゆめうおのまなとよがすくやくらむとくも成まく  
ちくまにまよがくまく泡ちよくすわひてくこま  
くらむれゆめれれ色のまくわのまわい  
ゆきわみぶおきそこどとあひてくさくのまく  
きくまくわめくさくもくわくわくのうまく  
くくまくわくもくくまくわくわくのうまく  
ねゆふおのまなとよがすくやくらむとく  
遊仙窟す睡とすくわくらう  
トクよくわくわくわくわくのうまく  
早ワクう自れのゆりうてまく集ものせくわくま  
しゆくく形くくくくわくわくのうまく

さて世とのうもんぬ もやくてわやんぢうなま  
くらうたのうくふくわうじゆうみやうあ  
ひみとくもんじう

からをやでへる わやゆへるさんかほのま  
まえもくううと男教よみてや

家とやくくとねえつをりえとうひま  
あらむをそりくともえくうかえまへ四月中  
お酉うけい往古はま日鞍馬へすくうや續日  
本紀第一云文武紀云二年三月乙丑朔辛巳禁  
山背國賀茂祭日命衆騎射スルヲ夏四月庚子禁繩賀茂  
神徒衆會集執杖騎射ハシツ惟當國之人不在禁限同元  
明紀云和銅四年夏四月丙子朔乙未詔賀茂祭日

夏四月庚子  
此已下  
流布本不見

自今以後國司毎年親臨檢察焉

世をうめゆにしとくかよひくせよもねする  
世をものうてわよくらうと海の泉即ちひきせり  
めぐらんすあひめくせとくう目とちひす  
えきてこうとかくとくくせくうわく文選  
屈原九歌曰鴻堂美人忽獨與余兮成史記項羽  
本紀云須臾舉胸籍師古曰胸音舜陳氏云宋玉  
之後漢世の弟といひてやうせぬもうちれのそむをえびれ  
くうすくはうみほどとくうとゆのゆかとあとくをぬ  
たのまくうへきよめとつのをひうりめんといひく  
くやくすくよわよくらうてもねえいつくくらう

ちぢりしきみのまへておもひをとむま  
まくまくおもひをとむまへておもひをとむま  
りゆきとおもひをとむまへておもひをとむま  
すあはれやおもひをとむまへておもひをとむま  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
りゆきとおもひをとむまへておもひをとむま  
らめくまへておもひをとむまへておもひをとむま  
めくめくめくめくめくめくめくめくめく

百五段  
もとかくすき  
ひやうりげ

志士の爲めに死んでゐるが、その死は、必ずしも、彼の爲めの死だ。死んでゐる人間の死は、必ずしも、死んでゐる人の死だ。

卷之三

まよひあわせとくらうむおのすうとうよ  
わくかくまくらうとまくらうみまくらう  
まくらうとまくらうのやまくらうかくらうと  
まくらうとまくらうひくらうわじのまくらう  
古今まよひあわせとくらうむおのすうとうよ

國朝志

のものへゆきけりかくらうからうかのあまうみま  
うかくとくう日本紀孝德天皇紀又輕みまとく

やまく源ひやかねうきふと我づぬとよとせうす  
いもとくとめじそとすかよすくわうきくらはる  
は二首もとおれとまうけんあれみくらはくら  
とすくらすくらかくはあけのとむかりめ  
えらきとめくへくらかくはあけのとむかりめ  
ほみくらわらすくらかくはあけのとむかりめ  
れとくよじくらきくらかくはあけのとむかりめ  
えりがうくらきくらかくはあけのとむかりめ  
みわくらきくらかくはあけのとむかりめ  
すくらすくらをくらきくらかくはあけのとむか  
脚後せきせゆるやくおかとくらすくらあらせ  
くらげくらくらでもくらじくらかくはあらくら

百六段  
しとくとくとくとくのせくらきくらかくはあらくら  
てくらをたののやくらくら  
さく泡まくらくら名みまくらのゆくすくら  
くらくらくらくらのゆくすくらくらくら

けとくとくとくとくのゆくすくらくらくら  
くらくらくらくらくらくらくらくらくら

とくとくとくとくのゆくすくらくらくらくら  
くらくらくらくらくらくらくらくらくら

とくとくとくとくのゆくすくらくらくらくら  
くらくらくらくらくらくらくらくらくら

まことにせめてやうふゝもあひよがふへんといせ  
まくすて縫のゆきわのくふとあるとまほの  
まぶゆうなむ代もまもたくもゆうやう代も  
まゆのまゆゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう  
田川とめじそく代もじそくとあるやうゆうゆう  
かくまくまくまくまくまくまくまくまく  
川まくまくまくまくまくまくまくまくまく  
いかりよから華陽國志と蜀時灌錦川流江中則鮮  
明也譙周益州志と成都鐵錦成灌於江水其又令  
明勝於初成他水灌不如江水也と云う後既  
あまのやうまくまくまくまくまくまくまく  
是のまくまくまくまくまくまくまくまくまく

うう往ううう草を花とほりぬみかううううう  
まくまくまくまく

代代ううわとまくまく様もまうのかじよまくまく  
是のまくまくおまくとまくと代もまくまくと  
りゆまくまくまくまくまく

ううううううううううううううう  
まくまくまくまくまくまくまくまくまく  
口 三曲川のうううううううううううううう

百七段 せあてやうとまくまくまく

まくまくまく

うううううううううううううう

田代よりうらやまちふみくわれとくまひりう

藤原敏行貞觀廿年十一月紀十二年任太角紀從四  
位下富士麻呂男母紀名虎女

山代よりうらやまちふみくわれとくまひりう

古傳の名のよどきあつ日辛紀と幹子の  
軌跡と明直とすとくわらへとくわらへとくわらへ  
とくわらへとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへ

とくわらへ

百曲 ものをかきほりもおもとむきよせまうえ

こゑもひきとすとくわらへとくわらへとくわらへ

乾子とすとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへ

かわらへとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへ

とくわらへとくわらへ

ゆへとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへ

とくわらへとくわらへ

とくわらへとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへ

さくとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへ

とくわらへとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへ

とくわらへとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへ

とくわらへとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへ

とくわらへとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへ

とくわらへとくわらへとくわらへとくわらへとくわらへ

至搜神記韓馬妻の喜雨露と同大水深とてと薦

賀する者をまこと私して其雨露と言愁且思也河  
大水深不得法來也とてとおひびく川とて

かかえ入てこりてぬりてやまくさく行徳よりゆき  
もゆきけしらふほんとくらむあすりゆうと帖より  
とくらむ川とてのをよめりとめりとめりとめり

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ  
とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ  
とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ  
とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

おまのうの久あよひじやまみのあらへるを  
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
女とおわして後やふゆくらう  
ものゆみつまくらへてくらへゆくらへゆくら  
みゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくら  
くらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく

ゑおみくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくら  
えゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくら  
やくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく

かすくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
あてゑ四在ゑまよゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
おあくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく

やまくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
うくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
れくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
ゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
きくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
んへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
とくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
くらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく

音序集  
わまくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
かくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
とくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
ゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく  
くらへゆくらへゆくらへゆくらへゆくらへゆく

さとよわうがまきあはれとまとうまく

めぐらす

万葉三

久堅のわえのふる日とみかへてわくとくとくとく

月十

金魚連

わくわくも

かく

あく

かく

さすがにまことにわざとてゆきよ  
かのせんとおもむくやうにあらへ  
わせいゆふとおのづからなる田ちふ乃ち  
もののかへりやうはうのひづるよ  
そわとこうつとくわすへりよまわす  
ひやくよみのまくとくわすねくまくわくとも  
わらじとくわくわくをくわくわく  
わくわくとくわくわくをくわくわく  
わくわくとくわくわくをくわくわく  
わくわくとくわくわくをくわくわく  
わくわくとくわくわくをくわくわく  
わくわくとくわくわくをくわくわく

うまきのよもやのぬとひりとくよまきのぬけま  
あく十と哀傷のりらゆれすりう泊ちよ様  
とうゆておまくさゆる花笑ぬと付みまくら  
くまゆりわまくせ花とまくら  
花まくらくまくらがふくらとまくらとまくら  
もくくまくられまくらえまくらまくら  
くまくらわくらとまくらとまくらまくら  
まくらとまくらとまくらとまくら

くまぬごとくうすきくのうすとしもひてすまう

とあうおぬちのうちとくいはくとまう

まくまくあへばもまくもまくまくら下うすま

まのまくまくまくまくまくまくまくまくまくま

かくまくたうねやねがまくわくうてちあくひのあ

まくまくもまくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

ハ生れやまきくらむためしもと生れんかくよ  
アセキシマカクサムキヤリテウタケテキラ  
人間の女とみり

キテアシカツカニスルモトナリモキセのためニシテキラ

キテヒモホヒテスモヒケルヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモホヘキテスモヒテスモヒテスモ  
ヒテヤウヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
ヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
ヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
ヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
ヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
ヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
ヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモ

○  
ノ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ

キテスモヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモ

ノ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ

キテスモヒテスモヒテスモヒテスモヒテスモ

ノ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ  
後撫養ミテスモヒテスモヒテスモヒテスモ

はすもあくしのちにあたるは意田のを志  
らんよとくあくやうと帖はせのわすめあくとよひ  
とせやうあまねくのを終脱あくとよひ  
きめあくのをやうとくのをよひとよひ  
やうのをよひとくのをよひとよひ

争ひをやうてゐる  
百士良  
男やうてゐる

和名集云數名云無妻曰蠶古頑及和名夜無乎言蠶了然不  
寢如魚目恒不閉者也人多之支也人也之也家旁とも  
可男女用也也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
えれをやりあそびとくにけり

同日、鶴の死にて御衣のたゞくみ鶴のかことめひてやうけ  
とまうらうすよみか本おもへ行まねやとの日致仕の表  
とまうらひと後拝集てまくらを年行辛未十九  
年まうり三代實添と考へんにふ三年四月十四日より改  
仕の表とまくとふくゆうなまく二月十四日またま  
り年三の表を四月十五日より改て許しとまくと  
改の行はむかつて改めゆく改めゆくのゆくの行ふるに仁川遊  
猿子芥川支野所とみに明天皇承和二年四月行  
幸于芥川とまくとまくと改めゆく改めゆくがま  
野行幸の國史又桓武天皇延暦十五年正月遊猿  
芥川支野されとまくとまくと改めゆく改めゆく桓武  
天皇とまくとまくと改めゆく改めゆく天皇とまくと  
天皇とまくと改めゆく改めゆく天皇とまくと改めゆく改めゆく續日

幸紀云延暦二年十月乙巳朔戊午日行幸支野放鷹遊獵庚申詔免當郡今年田租國郡司及行宮側近高年并諸司陪從者賜物各有差壬戌車駕至自支野之年十月丙申天皇行幸支野放鷹遊獵乙酉納之後二佐藤原朝臣經繩別業為行宮矣十年冬十月丁酉行幸支野放鷹遊獵是等ノ一ノ  
ノ今按三代實錄第四十九之仁和二年十二月  
ノ十四日戊午行幸芹川野寅二刻鸞駕出建礼門到  
門前駐蹕勅賜皇子源朝臣諱朱雀太上天皇帶劍是日勅  
參議已上着指布衫行騰別勅皇子源朝臣謹散位  
正五位下藤原朝臣時平二人令着指衫行騰鳥辰  
一刻至野口放鷹鶴拂擊野禽山城園司獻物充設

酒禮飲鴆一日暮乘輿幸左衛門佐役五位上藤原  
朝臣高経別墅奉進文膳一高経獻物賜役行親王公  
卿侍役及山城國司等祿各有差夜宿鸞輿還官是  
日自朝至夕風雪慘烈矣十八日壬戌詔授左衛門  
佐役五位上藤原朝臣高経正五位下以帝幸其別

舊本作點故有此加焉

そぞくまくらすよあわくまくらかへあわく

まろかうはみのれかよぢゆふる

空知後撰比  
さうひきよみ

やむるにまづ、ゆきぬを細すはひはまざれ  
とくにまづ、ゆきぬを細すはひはまざれ  
をやへりきのゆきのゆきよしむらす。まも  
をきふまわるをかうかきくまくちとくとく  
田舎へまわるをかうかきくまくちとくとく  
村のゆきあがすまう後援よ行幸のまく日ひん致  
仕のえをまうあぐく往まくまよまくもくまく  
もくせんあぐくとく

はね  
まみともまみまみをまくまくとくとく  
見がりまくまくとくとくとくとくとくとく  
かくやけのゆきへたりうすうすのうとくとく  
こくかくまくまくとくとく

は付まかも五年を暮すやへまたやうてかうとう  
つむほじすてん車かうわう経みはすと後をうけ  
かくやくそやくかくと御色かうとくとくとく  
ゆうかくまくまくとくとく

百十五段

ひくまちの國みをととくとくとく

トのまくまくとくとくとくとくとくとくとくとく  
男もやことのとくとくとくとくとくとくとくとく  
をくわせとくとくのめぐらとくとくとくとくとく  
けのよせてとくとく

さくわ名様をとくとくとくとくとくとくとくとく  
小町をとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

奥乃井都鳥  
共三奥川名所  
或與乃井手  
二作

家  
萬  
卷

まほくあつまひらむくわくよ  
やまも清きよま木板をわくとせと  
古木とえくわくの木板をわくとせと  
がおくわくとえくわくの木板をわくとせと  
閣脚はくわくの木板をわくとせと  
とくうまくわくの木板をわくとせと  
鶴脚はくわくの木板をわくとせと

アラタニイ  
モトハシマツ  
カクシテ  
アラタニイ  
モトハシマツ  
カクシテ

古往より文徳天皇天安元年行幸すとあらわすまことに  
やまとを経てかゝり奥儀おどり平城天皇を訪ね  
もとよりましも申御製とぞうめんとよしも入らざりあらず  
ねどもまことかづく今はとあずへつとの也

もわれまよがれやれうくちあくとくわくのめ  
てわせみてねおきくとくわくわくわくな  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
がくくくくくくくくくくくくくくくくくく

おもむくへやうめほく  
お家の娘す。宋世をわく  
ちきよのひのみあわうもあぢく仕よやまくとくとわく  
ゆまつとをかくもあまつとくはゆくとまのまま  
うねりうみくとくもく成やうに  
おどきくとくらうみくとく  
佐見れよづくのひのほまれまよの娘もやくとく外  
をかくすくとくうゆの外おでくとくの外  
をもぐりて計新ときまくもく達うゆうとけとちめ

まちやうす

蒙古語  
蒙古文

けくすはれやうとわうすまやう

追考日率後紀云和氣清麻呂往詣宇佑祐龜宣  
清麻呂新曰今大神所告是國家之大事也託宣難  
信願現神異神即忽然現形其長三丈許也如滿月

レーベルと立毛をもつてゐたのを記せば、甘くいふゆゑに  
はあらわさう、神祇部とのせて伊勢あわらより行まつ  
てから御けみゆきすひてときちりと經ゆるを  
あらわすと奥義あることをすやすやう筆をよみに

せふもかくへやまく（まほまほとまく）てのまく  
えをまくやまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくのまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまく

とあづらぬよしのうゑのとせりやく初  
舊事紀云磯城瑞雞宮御宇天皇御世遷建布都大  
神社於大和國山邊郡石上邑則天祖授饋速日命  
自天受未天圭瑞寶同共藏齋曰石上大神以為國  
家亦為氏神也之布都の社ハ瑞雞之御宇也

神樂採物九  
種賢木幣杖  
サラ釦鉢カ  
ツラ物

てとてかふうそノ神社のくめとすうて布翁  
の社へかうんへてかへてよめくよなとくと  
ともかうんのふせをかうて布翁の社翁神也と  
き居のくわせをよね兼てうかとのうゑな代くよ  
かうくう鴻鵠えんくらは代崇神天皇とみ皇居の  
あらうらかとほのからん神もうきのまくとく世  
もうらひとくとくにとゆうあうやうゑの鴻鵠もく事  
とくは鴻鵠日まれいとくやく外のやすよもも  
たとくとあらわくきくとくらむくとくよもじく  
うくろきよ

三  
いのホセ代くらうらのとくよみくよつむちくわく  
是くすくのくうきのひくにせうくとくわくうく

はううふせおみくよとくよくよくよくよくよくよ  
あくまむけのせ代くうそのとくよとくよくよくよ  
はくまくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
なまくでわくうての代のくやくくくくくくくく  
まくまくくくくくくくくくくくくくくくくく  
まくまくくくくくくくくくくくくくくくく  
まくまくくくくくくくくくくくくくく  
あくまくくくくくくくくくくくく

はううふせおみくよとくよくよくよくよくよくよ  
あくまむけのせ代くうそのとくよとくよくよくよ  
はくまくくくくくくくくくくくくくくくく  
なまくでわくうての代のくやくくくくくくく  
まくまくくくくくくくくくくくくく  
まくまくくくくくくくくくくく  
まくまくくくくくくくく  
あくまくくくくくく  
あくまくくくくく

毛詩國風  
葛之覃兮  
施于中谷

あかづくは木わきよ成れとえめのふとも  
ちくは四壁あくよくまくらひやうか帖  
りあがくよあゆまくあうとほくめうあく  
まくたくみくのくわかくのたくわくうんのあ  
もせくうとくまよみくらかくまくわく  
ゑくわくえぬくをくまくわくわく  
くまくわくわくくもくわくわく  
くふくわくわくくもくわくわく  
し

とももか  
かのひやうとほんわすゑやうと

○勢語臆斷

三  
大

はちゆみるみゆみりやか  
きよみるみしらみあみくとくもせんぐ  
すてはやんやのうくわくく  
まみみほくおさくあわせとくよ  
りくのあくわせせんじくもく  
煙段

お万葉化の字はの字とわらうおまえさうあ  
とかく傳り遊仙書の信の字と記念とみう  
るうを歌ひやう

かくもくすんわやれられかくもれもめやしめと  
あきよゆくよくよく歌えりかくもくじうみう  
くうたかくもくとよすみお歌とよすみ  
かくもくとよすみわくやうくくわくいふと  
もくわくとよすみわくもわくとよすみよくわく  
ははまめわくやれを歌うにち詠歌うにう但  
くうがくくふのうふと歌すくやううかううみ  
うとわくとくとくとくとくとくとくとくとく  
うう因東教合は傳師は傳と傳と傳と傳と傳

とおれとおれとおれとおれとおれとおれと  
とおれとおれとおれとおれとおれとおれと  
とおれとおれとおれとおれとおれとおれと  
とおれとおれとおれとおれとおれとおれと

かくもくわくもくおもむきのあううよ色くよくよ  
和名集云大和國宇智郡阿陀<sub>陀音可</sub>わくもくおも  
はくもくおもくもくもくもくもくもくもくもく  
ねう伝傳師と傳傳と傳傳と傳傳と傳傳と傳  
けくもくおもくもくもくもくもくもくもくもく  
屋民よもよもよもよもよもよもよもよもよも  
やくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

即ちまことにとてはまことにとてはまことにとて  
やうに世の事とてはまことにとてはまことにとて  
是かはるかにもかくへまことにとてはまことにとて  
まことにとてはまことにとてはま年に

參あよがすをもとめのとてはまことにとてはまに

まことにとてはまにとてはまにとてはまにとて  
はまにとてはまにとてはまにとてはまにとてはまに  
はまにとてはまにとてはまにとてはまにとてはまに

はまにとてはまにとてはまにとてはまにとてはまに

はまにとてはまにとてはまにとてはまにとてはまに

百草

かくはんかくはんかくはんかくはんかくはんかくはん

しらあをくわむとせむとせむとせむとせむとせむとせ

せとくすくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

りう男とくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

うきうきうきうき

ひくはうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはう  
人おゆくふゆくふゆくふゆくふゆくふゆくふゆくふゆく  
かのをくみあくみあくみあくみあくみあくみあくみあく

として讀べるやう

よもやうげくすむすむすむすむすむすむすむす  
おきき葉半お散立西よしよしよしよしよしよしよしよ  
とけうけ叶のやう葉のやう葉のやう葉のやう葉のや  
うす葉とく葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉  
きの葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉  
ひとととととととととととととととととととととと

せらうのひらへくわくことくわくことくわくことく

まよひしらひのむすびよりふくらまくら  
ひあやう文德實錄第四云仁壽二年二月甲戌  
授近江國筑摩神後五位下延喜式云筑摩長擇テ  
膳部中浦之

賀 部 中 浦 之

百二十二  
しりく 男梅 ほんとうわめよ めふく  
あくえき

梅壺の處花舍也 飛香舎の北五間四面  
鳥み花とめよすかよひやうもくすませうかくえ

ま神とかゑあくらをうみめよ、うは梅のむら  
はすとくらで、而も梅つやかんかくあ  
はさわせぬかへりすまう  
はさわせぬかへりすまう

はく  
やかみのまやくわとえりやうあすくかくまく  
はくまくわとえりはくま  
をくまくわとえりとくまくわとえりとくまくわ

教義ニト及ハ  
乾而將還シテカラ  
アリ



卷之三

卷之三

まわるゝへや  
東風吹きまし  
てはまくらす  
まくらすまくらす

内十七  
うきよとくわらはまくさむよあゆみゆ

感せしる次の涙のかきめくの

よれとかひきからくめのいはとそせざるかすと  
うれしきまうりやくとくとくとくとくとくとくと

嘉  
ムニシハタニトムク、  
泡とつるをかむる

書  
御  
内  
閣  
文  
庫  
イ  
山  
道

農  
男  
女

百三十四

ひもとくふかくりそいもとておたふやみとくそれ  
もあわわまくわわく やくふくわうか 左傳云  
邾子產謂子皮曰人心不同譬如面鳥舌豈敢謂子  
面如苦面卒下の句はよ門方業よ默然とけよ  
とくわくを既てやさんとくわく後攬よ  
多くらむよくのやんとくはきくもかひわくわく  
男のうみてこもつとくわくやひえく  
ニ段  
あくえ陽をまくまよとあくわくのねみわく  
あくわくわくわくとくわくよやくわくと  
とくわくわくわくよわくわくとくわく  
くわくわくわくよわくわくとくわく

つもくよひの口ひきをすてまくとくや  
とくかこせうもくわうあだまくとくのいたわん  
ゆきまくとくいもせんとすうやくふあくけつまくまく  
いとくかくわうあらとすくまくまくとくわうまくまく  
さとあらすくまく

とよくとよくまくまくあまく  
まくとよくまくまくあまくまくの歌くわく  
ぢう)

流布本與書云

抑伊勢物語根元古人說々不同或曰在原中將自記云々因茲有謙退比興詞等又曰伊勢筆作也或云生年十三幼書之似彼家集文躰故号伊勢物語以此兩說按之更難決之心中秘密身上興言他人推而難註之以之可謂其自書歟但疑萬葉古風中多載撰集歌仁和聖日之間粗記臨幸義關疑抄云定家卿自筆愚本云仁和二年十二月十四日行幸芹河或本不有之云々多本載之不可止此等事又不審伊勢家集其端文躰偏以同之是又見先達舊記庶幾其躰歟兩不知之此物語名字非彼筆者何祚伊勢乎或說曰為狩使下向伊勢仍有此名其說又難信始則載南京春日之詞次又註西對夜月思

富士山之雪武藏野之烟凡非伊勢國事多以為此物語肝心仍兩說共有不審古事只仰而可信又或說後人以狩使事改為此草子端為叶伊勢物語道理也件本狼籍奇怪者也伊行所為也不用之先年所書之本為人被借失仍為備證本重而所挾合也

戶部尚書判

天福二年正月二十日己未申刻凌桑門之盲目連日風雪中遂此書寫為授鍾愛之孫女也同二十二日挾畢此本無判

此一本合多本所用捨也可備證本近代以狩使事

為端之本出来未代之人今按也更不可用之此物語古人之說不同或称在原中將自記或称伊勢筆作就彼此有書落事等上古之人强不可尋其作者唯可翫詞花言葉而已

戶部尚書判

三代實錄第三十七云元慶四年五月二十八日辛巳從四位上行右近衛權中將兼美濃權守在原朝臣業平卒業平者故四品阿保親王第五之子正三位行中納言行平之弟也阿保親王娶桓武天皇女伊登內親王生業平天長三年親王上表曰無品高

教義云畧無  
文學ノ字有字  
ノアヤニリナル  
ヘシトイ企及  
ハナタヨニ無  
シテハ畧無  
不穩

岳親王之男女先停王号賜朝臣姓臣之子息未預改姓既為昆弟之子寧異齒列之差於是詔仲平行平守平等賜姓在原朝臣業平躰貌閑麗放縱不拘畧無才學善作和歌貞觀四年三月授從五位上五年二月拜左兵衛權佐數年遷左近衛權少將尋遷右馬頭累加至從四位下元慶元年遷為右近衛權中將明年兼相模權守後遷兼美濃權守卒年五十六右此勢語臆斷四卷先年艸之然其稿本甚汗穢自猶不得讀仍去春託老兄写彼稿本然猶無間暇不能校合近日得暇故一校以改正畢

元錄五年季春初三審兼桑門寂契冲

再記假名依日本記萬葉集和名鈔等後覽之人

### 莫恠之

嘉祥二年正月丙辰朔七日壬戌無位在原朝臣業平授從五位下是伊勢物語等の中より漏せり文德實錄にて業平の事一處も記されてゐる勘物より承和十四年正月補藏人もあり十四年八十有九より推考不見脱すと嘉祥二年十一月無位の人業和十四年補藏人よりもと不審ひり勘物の張りとく

### 勢語臆斷卷之五終

享和三年癸亥初春號行

皇都書林

吉田四郎右衛門

吉田屋新兵衛

